

2022年の出版市場を発表

紙+電子は2.6%減の1兆6,305億円。4年ぶりの前年割れ

出版業界の調査・研究機関である（公社）全国出版協会・出版科学研究所（所在地：東京都新宿区、理事長：浅野純次）は、2022年（1～12月期累計）の出版市場規模を『出版月報』1月号（1月25日発売）で発表しました。

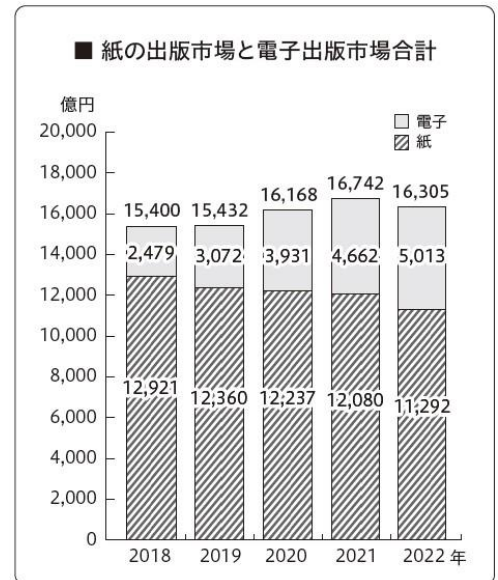
紙と電子を合算した出版市場（推定販売金額）は、前年比2.6%減の1兆6,305億円と4年ぶりのマイナス成長となりました。内訳は、紙の市場が同6.5%減、電子出版が同7.5%増。電子は前年までの2割前後の伸びから、一桁台と急速に鈍化しました。22年は、20年、21年と出版市場を支えてきたコロナ特需が完全に終息。また物価高も、趣味・娯楽品のひとつである出版物に影響し買い控えが発生しました。

□ 紙の出版物は6.5%減

2022年の紙の出版物（書籍・雑誌合計）の推定販売金額は前年比6.5%減の1兆1,292億円と1兆2,000億円を下回りました。内訳は、書籍が同4.5%減の6,497億円、雑誌が同9.1%減の4,795億円。書店店頭の実勢は、この数字よりさらに厳しいとみられ、書籍はいったん改善傾向にあった返品も、さらなる改善は進みませんでした。

書籍は、これまで好調だった文芸書、児童書、学参、資格試験などの売れ行きが鈍化。また、22年に一番売れたベストセラー本『80歳の壁』（幻冬舎）も発行部数が60万部弱と年々規模が小さくなり、またヒットする本がシニア頼みになっているのも懸念されます。

雑誌は、月刊誌（コミックス、ムック含む）が同9.7%減の4,017億円、週刊誌は同5.7%減の778億円。月刊誌の大幅なマイナスは、コミックスが二桁減と大きく落ち込んだのが要因で、20年の『鬼滅の刃』、21年の『呪術廻戦』（ともに集英社）と『東京卍リベンジャーズ』（講談社）の大ヒットと比較するとヒット作の数も部数規模も及びませんでした。



□ 電子出版市場は7.5%増の5,013億円、2桁伸長にブレーキ

2022年の電子出版市場は前年比7.5%増の5,013億円。内訳は電子コミックが同8.9%増の4,479億円、電子書籍が同0.7%減の446億円、電子雑誌が同11.1%減の88億円でした。出版市場における電子出版の占有率は30.7%と3割を超えました。

統計を開始した14年が1,144億円だった電子出版市場は、わずか8年で約4.4倍の市場に成長したことになります。しかしながら、前年まで2割前後と成長してきた市場に、22年はブレーキがかかり、伸び幅が一気に縮小しました。電子市場はいよいよ成熟期に入った感があります。価格に敏感な読者は複数のストアを回遊する傾向が強く、今後はより体力のあるストアが勝ち残っていくと思われま。

※電子出版市場規模は、読者が支払った金額を推計したもの。広告収入は含まない。雑誌には定額制読み放題サービスを含む。

<本件に関するお問い合わせ> ※本レポートの詳細は、『出版月報』2023年1月号（頒価2,200円）に掲載しています。

公益社団法人 全国出版協会・出版科学研究所 担当：高橋、柴田、水野

〒162-8710 東京都新宿区東五軒町6-24 TEL 03-3269-1379 FAX 03-3266-1855

<https://shuppankagaku.com>